

最強の魔法使いになったけどほのぼのと暮らしたい

その辺のぼっち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公必殺技出すの遅すぎだろ！

とろろんなアニメやら小説やらを見てて思ったのでノータイムで必殺技を使える主人公を作った

更新停止 2019/5/15

目次

プロローグ	1
第1話	6
第2話	11
第3話	16
第4話	21
第5話	27
第6話	33
第7話	40
第8話	47
第9話	54
第10話	61
第11話	67
第12話	74
第13話	78

プロローグ

「おめでとうございます！一等です！」

「は？」

「だから、一等です。おめでとうございます。」

「は？」

ちよつと俺が状況を理解してないけど状況説明をするぜ？

さつきまで自宅で寝ていたら真っ白な部屋の中にいて

金髪のギリシヤ神話の神様が着てるような白い服を着てる人に「二等です」って言われた。

うん、わからん

「あの…あんた誰ですか？」

「むむ！急すぎましたかね。それでは自己紹介を。」

“ 神様と呼ばれるような存在 ” です！長いので神様とでも呼んでください

痛い子だな。スルーしてあげるのが優しさだろう。

「あ、どうも。俺は…なんだっけ。」

「ああ、記憶はないでしょうから別にいいですよ。というか痛い子って何ですか！」

確かに俺に関する記憶がない。というか俺も気づいてないことをなぜ知っていた？

「それは要望によつてはこれから私が様々な情報を渡すので、それによる脳へのダメージを減らすために私があなたの記憶を少し減らしたからです。というか無視しないでください！」

「俺、何も言っていないよねえ」

「ええ」

「さつきから思考読まれてるよね、なに思ったか全部ばれてるよね？」

「ええ」

「本当に神様なのか？」

「ええ」

「へえ」

なら面倒だし喋る必要ないな

「順応するの速っ！ま、まあそんなことはどうでもいいのです。

一等が当たりましたよ！おめでとうございます。」

それだよ。一等ってなんだよ

くじ引きかよ

「まあそのような解釈で良いです。

最初から説明すると面倒なので端折りながら説明をしますね。

簡単に言うよ

地球が滅びる！

←

お気に入りだし何人か人間助けるかな

←

選ぶの面倒だな

←

くじ引きでもするか

←

くじ引きにするならあたりとかあったほうがいいよね

という経緯があつて一番最初に出たからあなたが一等です」

なるほどなんとなくわかった

「本当はもつといろいろあるんですがね、これ以上は長くなるだけな

ので端折ります。」

で、一等になった特典って？一等ってことは二等とかがあつて一等

になんか特典が付くんだろう

「はい。自分以外の記憶を持って転生します。あ、一つだけ要望を聞

けますよ。」

ちなみに二等は？

「自分以外の記憶を持って好きな時代の好きな生き物に転生します。」

なるほど

「まあ二等までしかないんですがね。

ちなみに三等は記憶なしで現代の生き物だけです。」

二等と三等の差、あんまりないな

「考えるのが面倒くさくて、テヘツ」

テヘツ、じゃねえよ面倒くさがってんじゃねえよ

まあいいや

「そうです!!そんなことはどうでもいいんです!それでは要望を聞きましよう。」

じゃあ異世界転生とか

「おおーいいですねいいですね、なら異世界チート転生でもしますか!

そうですね…じゃあ魔法のシステムについて教えましょう!」

それチートなの?…つーかそもそもチート転生なんて求めてないんだけど

「いいんです。私の趣味ですから。やりたいだけです。

異世界転生するならチートもつけないとつまらないです!

地球の異世界転生ものラノベは面白かったんですがね

滅んでしまったので実際にしてしまおうと思ひまして」

理由がひでえな!

で、なんで魔法のシステムを知ることがチートなの?

「そうですね…あなたは魔法とはどんなシステムで動いていると思ひますか?」

え、なんか魔力が動いて現象を発生させるとかそんなイメージかな
「それです!その魔力というのが間違いなのです。魔力なんてものありません!その勘違いがそこにいる人間の魔法のレベルを下げるのです!

えっと、実は地球の科学というものは案外馬鹿にならないものでして。確かに元素とかのシステムは大体あっているのですよ。

それで地球で言う量子力学を知っていますか?」

ああ、何となく聞いたことがある。なんか意思が現実に影響すると

かなんとか。

「まあそんなイメージで良いです。要はそれをクオーレレベルで実行してるのです。」

その意思によって現実に影響するのにも限度があるのですが、まあ気力みたいなものです。

しいて言うならそれが魔力ですかね。私はそれを感素と呼んでいきます。

それにより魔法というシステムが動くのです。

それで魔法適正は知識の量と比例します。

まあ空間魔法とかは四次元的な考え方でしか説明しようがないので人間には理解できません。まあ簡単に言うと時間と空間があつてそれを支える小さな基を動かしているんですが…わからないでしょうからこの辺で。

あとは転生させる世界の常識と一緒に渡しますね。

それでは情報を渡します。

少し頭痛がするのでご了承ください。

行きますね」

そう神様が言うのと頭の中にいろんな情報が入ってくる。

「ウグッ　　ツガアアアアアアア

ハア・・・ハア

頭痛ってレベルじゃねえだろこれ」

「すいません。それはどうしようもないのです。」

痛みを遮断してもいいのですがそれはいろいろと問題がありました…

まあチート付与完了です！おめでどうございますー！

「それではあちらの世界に送りますが何か質問は？」

「じゃあ最後に二つ教えてくれ。地球滅んだ理由は何だ？何人がそのくじ引きの対象者だ？」

「くじ引きについては一等があなた一人。二等が50人。三等が500000人です。」

「そうか、意外といるんだな。」

「いえいえ少ないほうですよ。何せ人類70億人いるんですから」「それもそうか」

「で、地球が滅んだ理由は水爆ですね。ある国が水爆の実験に失敗してその爆発が海底火山まで届きまして中にある溶岩がその近くの海底火山を誘爆し津波とか地震とかで核爆弾やら原子力発電所やいろいろあつて大陸のほぼ全部が海に沈みました。」

「簡単に言うとな世界一物騒で大掛かりなピ〇ゴラス〇ツチですね。」

「そうか」

「意外と反応薄いですね。」

「実感わかないし、もう終わつたことだし、これから新しい人生始まるし」

「それもそうですね」

「それではさつきと行きますね、この後に等以下の500050人に少し説明をしなければならぬのですから。」

「そういうと一歩離れて俺を指さした」

「すると俺の体がぼんやりと光り始める」

「あ、向こうに行つた時の名前は自分で考えてくださいね」

「ちよつと待つて名前のこと忘れてたよ！」

「考えんの面倒いからせめて前の名前だけで教えてれ！」

「そうですね。あ、でも流用するのはやめてくださいね。」

「あなたの名前は」日向《ひむかい》 月夜《つくよ》です。

「それではいい人生を。」

「そう言つた瞬間俺の体が強く光つた」

第1話

「うう〜」

え、ちよつと待つて

えつとさつきあの神様に転生させられて、喋ろうとしたら赤ん坊みたいな声が出た？あついでに目が見えないというか開けないっばい？うくん？

この感じだとなんか赤ん坊になつてるぽい？

「だあー！」

突っ込みしても力の抜けるような声しかでないのがすげえイラつく。

でもこれだと今どこにいるかもわかんねえな

神様に送られた情報ではこの世界はウォーハスというらしい。いわゆる異世界だ。ゴブリンとかオーガとか魔物も出てくる。

ここが森の中とかだとマジで危険だ。

いや待てよ、この世界の魔法は元素などの小さなものを直接操る。分子の動きを一つに合わせることによって物を動かすこともできるだろう

逃げることはできる。倒すことも多少できると思う。

いや脳を陽子、中性子、電子に分解して脳そのものを消すこともできるな。

よしそれで倒そう！

うん、今何気に危険なこと考えてる気がする。まあ俺が生き残るためだ。魔物に殺されるよりはましだろう。

それより問題なのはここがどこなのかだ。

どうやって目が見えない状況で周りがどうなっているかを確認しないといけない。

今のところ風の音しか聞こえないので村とか町の中ではないだろう。

というか今、音を気にしたら分かったけどざわざわと葉の揺れる音が聞こえてくる。

え、マジで森の中じゃないよね、魔物来ないよね!!

そして今思いついたけど周りに何かあるかわかるかもしれない。

まず砂粒をさらに小さく分解してその辺の窒素を分解し酸素と水素を作り、水にする。そうすれば粘土みたいになるはず。

それをそこら中に均一に塗り、形を作ってそれを電気信号にして脳に直接送れば形が分かるかもしれない。

そうと決まればやるしかない!

と、やってみたけど工程が多すぎて粘土作るまでで10分くらいかかった。

そりやそうだな。この世界の魔法を初めて使ったんだもんな。

それに均一に塗る作業もだいたいぶ集中してやったけど5mに塗るのに30分くらいかかっている。

電気信号に変えるのは一瞬で終わるからいいけど。

てなわけで電気信号に変換して脳に入力する。

「つああああああ」

やらかした。情報量が多すぎた赤ん坊の脳だと痛みが出るのは当たり前だった。

でもまあ認めたくない現実を知ることができた。

森の中だったよ畜生!めっちゃ木の皮の形知れたよ!

さて

まず食料をと思ったけど俺今栄養さえとればいいなら体の中で栄養を作ればいいや。

あとは家だな。服はなんか着てるっぽいからいいとして家を建てなきや雨降ったら死ぬ。

防ぐことはできるけどすぐ眠なってやばいからさっさと家を建てなきやいけない。

とりあえず目が開くまでは外見を凝っても意味ないので穴を掘ることにする。

自分の下の砂粒を一気に移動させると深さ70cmぐらいの穴ができたので

それを縦横1mに広げる。その辺の木を一つ抜いて元素同士の結合を切って縦横1・1mの板を作り穴の上に乗せる。板に少し穴をあけて空気が出るようにしたら、とりあえず家(仮)完成。

目が開くまではここで暮らそう。

あれから1年。

目は開いたし、つかまり立ちならでできるようになったけど歩くことはまだできてない。まあ移動は分子使って高速移動してるから別にいいけど。

目が見えるようになってからは家(仮)から出るようになった。周りを見てみたけどここ一帯は全部森だった。何でここに転生させたんだよ神様…

で少し家(仮)が手狭になってきたので家を作ることにした。

周囲10mの木を全部抜いて。コテージっぽいを作る。木材は原子同士を結合させてさらに中にダイヤを作って中に混ぜてるからその辺の木より硬いと思う。よく燃えるけど。

まあ雷は避雷針作ればいいし乾燥したら水蒸気作ればいいので火事にはならないはず。

さすがにゴブリン・ウィッチは出ないと思う。というか魔物もあんまりいないので大丈夫だ。ここ1年でも家(仮)の近くでは20回くらいしか会ってない。

あ、家(仮)の近くに来た魔物は全部倒したよ、脳を消して。魔物

の知識も神様にもらったのでどんな魔物かはわかった。

全部、フォレスト・ベアというB級魔物らしい。この森で見た中で一番強い魔物だ。まあ脳消せばどんな生き物も死ぬけど。

閑話休題

木材同士を結合して家を作り、鉄を作って避雷針を作る。

1年の間にだいぶ魔法も上達した。

まだ1歳なので活動時間が短い。すぐ寝るし。

家づくりに1カ月もかかった。もう少し活動時間が長ければ1週間ですでできたと思う。

で完成したのでフォレスト・ベアの毛皮で布団を作って普段はそこで過ごしてる。

服も毛皮を使って新しく作った。小石を全力でぶつけても破れなかったのでそこそこ防御力もあるようだ。

暇になったので世界に来る前に神様にもらった情報を確認する

この世界はウォーハス

中世っぽい感じの世界でいかにも異世界転生もののテンプレだ

エルフ、ドワーフ、獣人など、たくさん種族がある

言語はその種族によって違うが、神様に全言語の情報をもらったので読めるし、話せる。

主な職業をおうまかに分けると貴族、冒険者、商人、農家、漁師などどめちやくちやテンプレだ。

神様ホントにラノベ好きだな！

大きな集団は、国、ギルド、商会ぐらいか。

商人するつもりもないのでまあ冒険者になるかな。

冒険者になるにはギルドのアーティファクトでギルドカードを作らなきゃいけない。

このアーティファクトはラノベをもとに神様が作ったらしい。

ギルドカードには名前、年齢、ギルドランク、貢献ポイントが書いてあってギルドランクは貢献ポイントを増やしてギルドで申請するとランクアップ試験が行われてそれをクリアするとランクアップす

る。

ランクは低い順にF↓E↓D↓C↓B↓A↓Sだ。

面倒くさいがランクが上がれば収入は増えるしAランクになれば男爵位くらいの発言権を持てる。

Sランクは英雄だのなんだの言われるレベルで王族もあまり強く命令できないようだ。

まあ今生きてるSランク冒険者はいないけど

フォレスト・ベアを討伐できるのはBランク相当の人からでとても強い魔物らしいのだがいかんせん俺の魔法が強すぎてどの魔物も雑魚同然である

魔物には討伐推定ランクがあつて、たとえばCランク冒険者でもフォレスト・ベアを見つけたら逃げるのが常識らしい。1歳で倒せる俺つて…

ギルドに入れるのは10歳からだそうだ、ならこの家で10歳まで暮らそうか。

第2話

ある日魔法の練習をしていると家の前でドンツ！というそこそこ大きな音がした。

魔物の来る気配はなかったし何かと違ってドアを開けるとクレーターがあつてその真ん中に50cmぐらいの石があつた。

「あうー！」

まだ赤ん坊なので驚いてもこれぐらいしか喋れない。なんとも力が抜ける声である。

近づいてその隕石っぽいものに触つてみると、その隕石っぽいものから神様が出てきた。

「おっ！繋がった繋がった！やつほー！そろそろ異世界になれたかな？神様だよ！」

ちよつとうざかったのでその辺の石をぶつけてやろうとしたがすり抜けていつてしまった

「危ないなあ。私が実体を持っていたらケガするじゃないですか！

ホログラムみたいなものなので攻撃は効きませんよ！」

うるせえ！そしてうぜえ！大体なんでそんなノリ軽いんだよ！

こちとらいろいろ聞きたいことがあるんだよ！

「説明をしに来たんです。なぜあなたが赤ん坊なのかとここがどこなのかを。」

「そうだよ！なんで赤ん坊なんだよ！あとスルーすんな！」

「えつと赤ん坊な理由ですネ？」

新しい体が必要だったからですネ。この世界では感素炉という内臓がありまして、前のあなたの体をそのまま使うと魔法が使えないのです。

なのでこの世界に慣れてもらうのもかねて、この世界の赤ん坊の死体にあなたの魂を入れたんです。その時サービスで前のあなたの体に似た死体を探してあげましたので体格も顔も大体同じです。そのほうが転生つぽいので

ノリが軽いのはリアル異世界チートを見てテンションが上がって

いるだけです。」

お節介どうもありがとう、ラノベオタク

で、その感素炉ってのは体のどこにあるんだ？

「急ですね。」

盲腸のある位置です。この世界の人間には盲腸がなくて代わりに感素炉があるのです。」

へえ

「で、ここがどこなのかですが、ネスティア大森林と呼ばれる場所ですね。」

直径5kmほどの大きな森です。その中心からやや東です。

そしてここを中心に直径50mの結界があつてその中にはB級以上の強さがないと出入りできません。」

それでこの近くには魔物があまり出なかつたのか。

ありがとう。なんか世話になつたらしい。

というかなんでB級以上なら結界を出入りできるようになつてんだ？

もつと強い結界にすりやもつと安全なのに。

「それはあなたが生まれた時の予想最低レベルがBだったからですね。」

あなたのランクはもうSに匹敵するんですよ。でもこの世界に来るときにBランクになる可能性があつたので。結界を出れないとつまらないでしょう？そのためです」

なるほど、いろいろ配慮もして頂いたようで。

「ちよつとは感謝してくださいね！」

はいはい

「全然感謝が伝わってこないし…

まあいいです。説明は終わり。何か質問はありますか？」

いや、いい。

ありがとうないろいろしてくれて。

「おおーそうですちやんと感謝は口に出すものなのです。」

やっぱウゼエわ、あんた

「なつ！ま、まあ用も済んだのでこれで。」

「ちやんと自分の名前考えてくださいよ〜」

「そういえばなんで名前変えないといけないんだ？」

「それはこの世界だと、日本人名は不自然だからですね。」

「何かと警戒されては不便でしょう。」

「それもそうだ。」

「はいはい、考えておきますよ。」

「ほんとに考えてくださいよ！」

「じゃあ、何かあったらこの石に触れて強く念じればつながるはずですよ。」

「それでは」

「そういうと神様は消えた。」

「この石じゃまだな…」

2年後

喋ることも歩くこともできるようになって剣を扱う練習をするようになった。

冒険者は基本荒くれものばかりで魔法使いはあまり多くない。剣を持つているほうが警戒されにくいしパーティ勧誘も少なくて楽なのだ。

「そういう事情があつて剣を使えるようになったのでどうせなら無限の〇製とかできるように…と考えて元素を操り剣を作る“錬成”を練習していて思いついた」

「元素を操れば脳や内臓とか肉体を作れるんじゃないか？」

「物は試しでその辺でゴブリンを狩ってきてゴブリンの脳の成分を解析。」

「してみたのはいいものの、かなり複雑で少ししか進まなかった。」

具体的には5%ぐらいしか解析できなかった。

解析の仕方は解析するものを少し削って分解し元に戻す。これを繰り返し続けるのだが木や鉄や石は少し解析したパターンをつなげるだけでできるのだが魔物や動物だとそうもいかなかった

例えば筋肉を再現するには一度それを全部解析して、それを今度は全部覚えて並べなきゃいけない。

そもそも覚えることがほぼ無理なので紙に書くのだが複雑すぎて書くのも一苦勞。面倒くさいことこの上ないのだ。

そして次の日試行錯誤して思いついた。

脳の記憶領域を作つてしまえば紙に書く必要もないのでは？

じゃあやってみようと解析して紙に書く作業を2か月近くやっているとようやく記憶領域の設計図が完成。あと毎回記憶領域つていうの面倒なので適当にN+という名前を付けた。

あとは作るだけなのだが作ったN+をどうやって体内に入れ本体の脳につなげるかを考えていなかった。

そこで神経と血管を空間魔法でつなげることにした。

異空間を作りそこにN+を入れて神経と血管をつなげば体内に入る必要もなくなり、かなり自由に繋がられる。

そこで必要になるのが、神経と血管の設計図と異空間だ。

神経と血管の設計図は解析して紙に書けばいいのだが、空間魔法は訓練するしかないのだから空間魔法を全力で上達させることにした。

異空間作れば金ぴかさんの技もできるのでは？と少しテンションが上がった。

そして完全な異空間を作るのに3年も使つてしまった。

もう7歳である。剣術もだいぶうまくなったと思うし、錬成もできるようになったのでいろんな武器を作った。

金ぴかさんの技も武器があればできるようになった。
できるようになった日はめちやくちや原作ごっこして遊んだ。

それはもう、あとで恥ずかしくなるぐらいはしゃいだ。

閑話休題

異空間ができたことによってN+を作りつなげることができるようになった。

自分の血管と神経を少しとって解析し紙に書いて作りN+につなげ、異空間に入れる。

自分の体内に血管と神経を追加して空間魔法で異空間の血管と神経とつなげる。成功した。

これにより一度解析したものはいつでも作ることができるようになった。

まずさつきつなげたN+分でN+の作り方を覚える。これでいくらでもN+が作れるようになった。

次の日すぐにN+を作り始めた素材はそこらじゅうの窒素を分解して元素を作ればいいので楽だ。

調子に乗って3つN+を作った。使いだそんなにないのに…

2つ目のN+に筋肉の設計図を記憶し余った二つはとりあえず空間魔法で保管用異空間を作りそこにしまった。

あと3年で10歳なのだが

何をして過ごそうか…

第3話

「あと3年か…」

俺が10歳になるまであと3年あるから何して過ごすか考えている。

とりあえず名前は昨日1日かけて考えて「ユナト」にした。

月を意味する言葉で中国語のユエとロシア語のルナを合わせてユナ。女性名っぽかったので夜の英語、ナイトを合わせた。

そこ！厨二病って言うな！

で、なんにしろあと3年待たなきゃ行けないのでその間の暇つぶしを考えなきゃいけない。

「N+改造しよう！」

この間造ったN+に処理能力をつければ今よりも頭の回転を早く出来たり、分子操るのもうまくなるかもしれない。

「じゃさっさとやろう」

調子に乗って作って余った2つのN+を改造することにする。保存用異空間からだしたのだが…

「腐ってる?」

よく考えたら当たり前だった。冷凍してないし。

「なら保存用異空間を強化しようか」

保存用異空間の中の時間を止めることができれば腐ることもないはずだ。

「時間魔法ってできるのか?」

その辺があいまいなので神様に聞くことにした。

家の外にある石に触れて神様を呼ぶ。

「はいはい。呼ばれて飛び出て神様だよー！」
帰ろう

「ああ待って待って。ふざけすぎたよー！ごめんなさーい」
お前から思ってたけど、残念属性だよな。

「なっ。残念とは何ですか！私神様ですよ！」

はいはい

それで時間魔法ってできんの？残念神様

「ぎ、残念神様…」

ま、まあいいです。

時間魔法はできることできるのですが少し難しいですよ。普通の人は30年練習してもできない人だっているくらいですから。

空間魔法と同じようなイメージできますよ。」

そうか

ありがとな。

「いえいえ、ラノベ見てるみたいで楽しいですしいですよ」

その辺が残念属性なんだよ

「そんなんっ！別にいいじゃないですか！面白いじゃないですか、ラノ

ベー！」

まあ面白いけどさあ…

「面白いならいいんです！それではさようなら」

帰りやがった…

まあ練習するかね…

3日後

練習を始めたのはいいけど全く進まない。

キリがないので先に処理能力を上げて習得スピードを上げることにした。

まずはN+を造り、脳の処理部分を解析、記憶する。で、造る。

N+の入ってる異空間に入れて神経と血管をつなげたら完成だ。

試しに異空間を造ってみる。

「2つもできるとはな…」

思った以上の成果である。

前はだいぶ集中しないとできなかったことを余裕でできた。試しに3つ目も造ってみる。

「できない、か」

この調子だと一つ処理部分を作るごとに同時に操れるものも増えるらしい。ならやるしかない！

処理部分（面倒くさいのでS+と呼ぶことにした）を造ってはつなげて、5つほどS+をつなげた。

これで5つ同時に異空間を造れた。

同時に別の魔法も使えるのかと思いい火をおこし、水を出し、雷を発生させ、土を動かし、風をおこし、異空間を2つ造る。

「よし、できるー」

練習をしていたら急に意識がもうろうとして来た

「酸欠か…」

酸素を体内に作る余裕もなく気絶してしまった。

「気絶したか」

幸い1時間で目は覚めた。

脳に使うはずの酸素が単純計算で7倍だしそりや普通に呼吸をしても酸素足りないよな…

また気絶しては面倒なので4つS+を造って同時に10個の魔法を使えるようにし、1つを体内の二酸化炭素を酸素にかえる機能にした。

これでいつでも10個の魔法を行使できる！

さらに頭の回転速度も大きく上がったし魔法の正確性が上がった。

これで時間魔法も習得が早まったはずだ。

あれから3年。時間魔法はできるのだが、時間停止ができていないのだ。

時間を加速させたり、減速させたりすることはできて、固○時制御を代償なしでできるようになった。また原作ごっこした。

閑話休題

保存用異空間もめちやくちや減速させているのだが減速だということもS+を一つ使うのだ。

時間停止ができれば永久に時間が動かず、S+を使わなくて済む。

そんな理由もあってさっさと時間停止をできるようになりたいのだが難しいので、少し癪だが神様を呼ぶことにした。

というわけで来てもらったぞ

「あなた少し人使い荒くないですか？人じゃないですけど。

というか習得するの早すぎませんか？この世界の人間の最速記録の10分の1ですよ？」

まあ、チートっぽくていいですけど。

で、時間停止ですね。これは時間魔法というより、時空魔法なんですよ。時間と空間を同時に操らないといけないのです。時間を止めると空間の種類が無理に代わってしまうのでその空間は消えてしまうのです。そのため時間を止める前に空間の種類を変えないといけないのです。

で、空間の種類の変え方は人間が独学でやると最速50年かかるのでここで教えますね。これ以上待つのは飽きるのです。」

最後お前の都合かよ…

で、その教えるってやつはここに来る前と同じ方法だろ？ならN+つけるからちよつと待ってくれ。

「理解が早いですね」

まあS+10個つけてるしな

よしできたぞ。さつさと来い

「はい、それでは」

神様が指をさすと大量の情報が俺の頭に流れ込んでくる。

前回は痛みでそれどころじゃなかったけど痛みなしの場合こんな感じなんだな

「ええ、そうです。」

それでは早くやってみてください。

空間の種類を変えると重力魔法も使えるようになるんですよ。

そろそろ旅立ってくださいね。詰まんないので。」

結局お前の都合かよ…

まあいいや、じゃあな

「ええ、さようなら」

神様が帰ってから少し練習して空間の種類も変えることができた。

保存用異空間も時間停止出来たので目標は達成した。保存用異空間も進化したし名前が長いのでポーチと名付けた

あとついでに重力も操れるようになった。無重力って楽しいね！

今俺が使える能力を考えるとめっちゃくちゃチートだった。だって物は自由に動かせるし情報処理能力は普通の100倍だし、どんなものも作れるし、身体能力は分子使えばブーストできるし。何なら天災ぐらい余裕で消せるし、起こせるし。

「我ながら人間じゃねえな…」

そんなことを思ったユナトだった。

第4話

ポーチも完成したしすべての魔法も使えるようになったはずなのでそろそろこの家を出る。

そのための準備、といっても何も持っていくものはないのでとりあえずいろいろと作る。

まずは腕時計。この世界は約2時間おきに1度、正午に3度鐘を鳴らすのだが、これがあまり正確ではないし、町の外はあまりよく聞こえないので自分で時計が時計を持っているに越したことはない。アーティファクト扱いされるだろうし俺以外には見えないようにしておこう。

次にテント。野営は冒険者にとって日常茶飯事だ。一人の時は異空間に入ればいいのだが、荷物がないと、いろいろと怪しまれる。しかも空間魔法を使えるのは国の直属の魔法使くらいだ。それっぽくしとけばいいやと思えばオレスト・ベアの毛皮を加工して折り畳みテントにした。これを持っていけばそんなに怪しまれないはずだ。

あとは剣を造って終わり。剣は日本刀にした。暇なときに強い合金を造ろうとして試行錯誤していたら、ダイヤより硬い金属ができてしまったのでそれを使った。その素材の名前はなんとなくヒヒイロカネにした

一応日本刀はこの世界にもあるらしいが使う人は少ない。まあ切るのにだいぶ技術がいるため仕方ないのだろう。

あとはちゃんとした服があれば人に見られてもあまり怪しまれないはずだ。

ちなみに今の服装はフォレスト・ベアの毛皮を適当にくつつけて服っぽくしてるだけだ。ズボンも同じような感じなのであまりいいように見られない。というか俺の見た目も相まって捨て子とか奴隷に見られると思う。

閑話休題

とりあえず準備もできたので。ここから出ていく。家は少し迷ったけど壊してダイヤにした。盗賊から奪ったと言えば多少売れるか

もしれないし、いざとなったら武器にできるし。

家の前の石はもう邪魔なので神様を呼んでどけてもらうことにした。

邪魔だからどけてくんね？

「え、この石消すと私と会話できないですけどいいんですか？」

え、別にいいけど。

「……………」

で、さつさとどけてくんね？

「まあ結界切れたらどうせこの石もただの石になるのでいいですけど…

少し冷たくありません？」

だってうっせーし、うぜえし

「反論しにくいのがイラッと来ますね…

そうそう！どうせなら旅立ちの記念にチート武器でも渡そうかなーと思ひまして、

その石に剣が降ってくるので気を付けてくださいね」

はっ？

ドス！

急に大きな音がして石には剣が刺さっていた

もっと穏便な渡し方なかったのかよ…

「いえいえ私のことなんてどうでもよく思ってる人にはこれくらいがちょうどいいかな」と

意外と根に持ってんじゃねえか…

まあサンキュな

「ええ、これからも頑張って生きてくださいね。

具体的にはチート無双して頂けると私が楽しいです。」

あんまり目立つ気はないんだが…

「異世界チート転生系の主人公は誰でもそんなこと言ってますよ。

そろそろ結界が切れるので、さよならです。ユナトさん。」

ああ、じゃあな

神様が帰ったことを確認して剣を抜く。

「硬ッ」

めちやくちや抜きにくかった。まあ抜けたけど。

120cmくらいの片手用直剣だ。

「長いな…」

そういつて剣を見ていると石があったほうが光りだした

見てみると、石が無くなって代わりに紙と鞘が落ちていた。

紙を拾って読んでみる

~~~~~

その剣の説明をするのを忘れていたので送っておきますね。

神剣カルテウス

破壊不能武器

素材は“分子そのもの”

分子を圧縮して人間が触れるようにしたもの

この剣は質量が月と同じくらい

重さはいろいろ改造してるから大きめの両手剣と同じくらいです

剣の刃先が分子一つになっているのでどんなものでも全部きれいに切れます

に切れます

長さは基本125cmの片手用直剣

任意に形を変えることができます

こんな感じですよ

こんな感じですよ

これ使ってどんどん無双してください

あと鞘には125cmの片手用直剣しないと入りません

追記

何か連絡することがあればこれみたいな紙を送ります

ついでにこの紙は10分後に爆発するのでさっさと旅立ってください

さい

~~~~~

「……神劍か……」

「強すぎんだろ！」

「罅迫り合いすらできねえよ！」

「間合いすらねえよ！」

「あてこの紙爆発すんのかよ、〇〇7か！」

「なんかもうどうでもよくなってきた……」

紙を捨て、さつき新しく造って腰に下げた刀をポーチにしまい、カルテウスを鞆に入れて背中にまわし、時計を見る

「12時前……まあ、行くか」

「そう呟いて、森の中へ歩いてった。」

しばらく歩いていっているとフォレスト・ベアがいた。

「ちようどいいから試し切りさせてもらおうぞ。」

フォレスト・ベアは一度立ち上がり吠える

「ウオガアアアアア」

「威嚇か？怖くもねえぞ」

「そう言ってからカルテウスを抜いて剣を向ける。」

少し剣をの長さを減らして90cmくらいにしたところでフォレスト・ベアが手をついて走り始めた。

4足歩行で突進してくるフォレスト・ベアの顔に剣を向けて150cmぐらいに伸ばしながら突く。

ぱつくりと鼻から耳の後ろまで貫通してしまった、何の抵抗もな

く、さも素振りをしたかのように
鼻から耳の後ろの上が飛んでいく

「あ………」

「……………」

カルテウスを振りついている血を振り払い元の長さに戻して鞘に
しまう。

そのまま合掌して

「なんかほんとすんませんでした。」

全力で謝罪する。

殺したことよりこの剣を使ったことに対して

だってフォレスト・ベアの切り口奇麗すぎるもん。なんか奇麗な断
面図みたいになってるもん。まったいらだもん。

この武器だめだ強すぎる

早速使う気が失せたのであった

フォレスト・ベアの死体をポーチに入れその辺の木にもたれかか
る。

カルテウスをもらう前に造った日本刀を出し、装備する。カルテウ
スはポーチにしまうことにした。切れ味が良すぎるから。

「行くか………」

そういつた瞬間にゴブリンの声が聞こえた。

「ギャアアー！、ギャアアアー！」

5匹くらいの群れのように。

棍棒を持つてるやつが3匹と剣を持つてるやつが2匹

「試し切りパート2だな。」

そう呟いて、刀を抜き腰だめで構える。

こちらに向かって走ってくる棍棒持ちゴブリンの右腕を切り落とす

今度は感触があつた。

「よしー！」

何について喜んでいるか謎である。

「キイイイイイ」

斬つたゴブリンが怒つたように叫び声をあげる。

「うるせえー！」

叫び終わる前に頭を穿つ。

「次！」

傍から見ると10歳の子供がゴブリンを圧倒しているのだ。異常である。

そんなことを気にもしないユナトはとびかかってくる棍棒持ちのゴブリンを2匹まとめて首を斬り、すぐさま飛んでくる死体をポーチにしまつておく

剣を持つてるゴブリン二人が半歩下がつたのと同時に、駆け出して一匹の頭をつく

すぐに頭から引き抜いて、回転しながら逆手でもう一匹の首を切り飛ばし倒れる前にポーチに入れておく。

「弱かつたな」

そう呟いて納刀しポーチからゴブリンが使っていた剣を取り出す。

「刃こぼれ多すぎるだろ…」

少し鉄を動かして刃こぼれをなくし刃先を鋭く整えた

「よしー！」

武器庫用の異空間に入れた

金ぴかさんの技用である

「じゃ、今度こそ行くか」

誰に言うでもなく呟いて歩き始めた

第5話

出発してから2時間で森を抜けた

森を抜けるまで最初の2回合わせて8回ほど魔物とエンカウントしたが、弱かった。カルテウスを使うこともなかった。

剣を持った魔物もいたが5匹しかいなかったのであまりいい収穫ではないが、ゴブリンの死体はポーチに入れてあるので多少金にはなるだろう

日本刀を使った剣術が異常にうまかった

たった6年修業しただけでここまで上達するのか?と思ったが転生する前は剣道とかを習っていた可能性もあるのでスルーした。だって強いに越したことはないし

閑話休題

とりあえず森は抜けたので盗賊を探す

盗賊の持っているものを使うつもりだ。旅人から奪ってもいいのだが、さすがに申し訳ない。盗賊はいても邪魔なだけなので有効活用する。

あとは服だ。

そもそも布があれば服は作れたのだがフォレスト・ベアぐらいしか毛皮を持っている魔物がいなかったのだからちゃんとした服が作れなかった。

盗賊の着てる服の素材を複製すれば、自分のサイズに合う服を作れるので今着てる奴隷みたいな服を変えることができる。

武器も持ってるだろうし、脅してアジトに行けばいろいろため込めるだろう

どうせ全部盗んだものだ、全部奪ってやればいい

先に盗んだのはそっちだろう?

ということで空気の揺れを感知して人を探しているのだが…

「見つけた」

ここから北に約1kmおそらく15人と馬車1台
分子を使つて全速力で向かう

分子を使つて移動するときには周りの空気と一緒に移動している。
空気抵抗で死んじやうし

約10秒で50m程手前に到着。陰に隠れて状況を確認する

よく見ると商人の馬車が襲われた後らしい

何人が軽い鎧を着ている死体と、そこそこいい服をきた死体がある
ちやうどいい、あの馬車に乗つてる荷物ももらつてしまおう。

盗賊は6人、魔法使いはいない。

余裕だな

両手斧持ちのモブ盗賊A、槍持ちのモブB、あとは片手剣持ちのモ
ブC、D、E、F。全員が俺よりでかくて体格がいい。まあ、俺10
歳だし当たり前か

戦力を確認してからゆっくりと近づいていく

「なんだあのがキ」

「殺すか」

「拷問もありじゃね?」

人を傷つけることが趣味の外道らしい

まあなんにしろ殺すけど

ニヤニヤと笑いながら盗賊たちは剣を抜きゆっくりと近づいてく
る

俺は剣を抜くと同時にゴブリンから奪った剣2本を異空間から射
出する。

「なッー」

一番後ろにいるモブC、Dの頭を貫いて殺す

刺さったゴブリンの剣を回転させてモブC、Dの前にいたモブEと
モブAの首を飛ばす

それと同時におびえながら突っ込んでくるモブFの剣をはじいて
落とし、首を刺して殺す

「もうやめてくれ!降参だ!死にたくない!」

モブBは槍を捨てておびえながら言う。たった5秒で終わってしまった

さて、終わったしアジトにでも連れてってもらおう♪
完全に遠足気分である

モブBの1mほど前に立つてなるべく冷たい声で言う
「殺されたくなければいうことを聞くんだな」

思った以上に冷たい声が出せた

「わ、わかった！わかったから命だけは勘弁してください！お願いしますー！」

大の大人が10歳の子供に向かって土下座をし始めた
そこそこシニールだ

「じゃあお前らのアジトに案内してくれ」

「わ、わかった！」

案外聞き分けがいいようだ

「こ、こっちだ」

歩きながら落ちている剣6本と両手斧、槍の刃こぼれを直して刃先を整えて回収する。

「ひいっ」

「どうした？速く連れてっててくれ」

数分ほど森の中を歩くと小さな洞窟があった。

すぐに索敵、中に3人

どうやら馬車を襲った6人は下っ端だったようだ

真ん中に190cmくらいありそうなデカブツ、明らかにリー
ダー。足元ある両手剣が主装備かな

右にひよろひよるな坊主。幹部っぽい人。後ろに立てかけてある
弓矢が武器だろう

左のナイフに毒を仕込んでるやつ。多分幹部。こいつは投げナイ

フ使いだな

「ああ？なんだそのガキ？」

「お前武器どうしたんだよ？」

「どうかほかのやつらはどうした？」

セリフが決まっていたかのような会話を見て関心しているとモブBがデカブツに走って行く

「助けてくれ！ボス！このガキにみんな殺されちゃった！」

盗賊に村を襲われて助けを求める村人みたいに見えるが盗賊である

「ほう、そんなガキがねえ」

余裕そうなデカブツさん

「何言ってるんだ？そんなガキが強いわけねえだろ」

坊主さん、油断はよくないですよ？

「まあ、待て。案外強いかもしれないぞ？」

あなたよりは強いと思いますよ？デカブツさん

「なあガキ、お前このエリック盗賊団に入らねえか？」

デカブツさんの名前はエリックというらしい

「断ると言ったら？」

「殺すd」

エリックさんがそういった瞬間にさつき奪った槍を坊主さんにに射出して頭を貫通させる

そしてすぐさま槍を回収する。

「人をなめると痛い目見るぞ？」

挑発的な声で言って抜刀する

「ひいっ」モブBは少しおびえすぎじゃないですか？

「なっ！てm」

ナイフさんが言い切る前に両手斧を回転して射出し首を飛ばしそのままモブBの首も飛ばしてすぐに斧を回収する

「お前ナニモンだ・・・」

「おっと、自己紹介がまだだったな。」

どうも、さつきあなたの子分？を殺したユナトです。」

適当な挨拶をしてみる

「いや、盗賊団とか入る気ねえし。どうせ断る気だったから殺すって言われて殺される前に殺さなきゃなと思っただよ。」

「そういうわけだからお前も殺すよ」

冷たい声でそう言った瞬間にデカブツさんがようやく焦り始める

「ま、待ってくれ！か、金ならあるぞ！ほら、な？だか」

「殺すって言ったのはお前だぞ。殺される覚悟ぐらいあつて言っただろうな？」

捨てるように言っただかブツの首を切り捨てた

「あつけないもんだな」

呆れたようにそう呟いて刀についた血を振り落とし、納刀する。

デカブツの足元に落ちていた両手剣の刃こぼれをなくして回収し、洞窟の奥に入ってみるとお金の山と鳥籠があった。

鳥籠の中には赤と蒼の目と羽毛を持った小さな竜がいた

「キュイ？」

「こいつは…ウオーターリドラか？でも目が…」

ウオーターリドラは四足歩行で水色の羽毛を持つ小さな竜で水を操ることができる。

普通蒼い目を持っているはずなのだが、こいつはオッドアイなのだ
「とりあえず逃がすか」

鳥籠の扉を壊して開く

「キュウウ？」

「大丈夫だぞ」

「キュウウー！」

腕にすり寄ってきた。どうやら懐いたらしい。

「お前な…」

貴族かなんかが買って商人が運んでる最中にこの盗賊に襲われたとかそんな感じかな？

「まあいいか」

「付いて行きたいなら付いて来な」

「キュルウイ！」

可愛いし連れて行ってもいいだろう

「名前がないと不便だな…じゃあスイでいいか、よろしくな、スイ」

頭をなでながら言う

「キュルウイ！」

嬉しそうに返事をしたスイは俺の肩の上に乗った

それにしてもなぜオツドアイなのだろうか？

第6話

盗賊のアジトの中にあつたお金はポーチに入れた
少なくとも金貨1枚分のお金はあつただろう

この世界のレートは

小銅貨が十円くらい、銅貨が百円くらい

小銀貨が千円くらい、銀貨が1万円くらい

小金貨は十万円くらい金貨は百万円くらい

白金貨は1億円くらいになるらしい

白金貨は時によって値段が変わる。

それだけ白金に価値があるんだろう。

閑話休題

洞窟の中にはほかにも剣がいくつかあつたので刃先を整えて回収
する

これでここにはもう用はない

「戻るか」

「キユイ」

死体の服をあさる

そこそこいい服を着ている商人だったのでそれなりのお金を持つ
ているはずだ。

護衛の人たちはの鎧に均一性がないのでおそらく冒険者を護衛に
雇つたんだろう

マナー違反だがギルドカードを見てみるとDランクだったのであ
まり強い冒険者ではなさそうだ。お金はあまり持っていなかった。

装備していただろう剣は回収しておく

まだ奴隷みたいな服のまんまだから服の素材をさつさと解析して
服を作る

「解析完了っつと」

服の素材を解析して、冒険者の装備の素材を複製し布を造り服にす
る。

黒のズボンと黒のブーツ、黒のシャツに紺色のパーカー。鉄のチエ

ストプレートだけつけておく

これで頑張つて子供が冒険者で稼いでるように見えるだろう
真つ黒なのは趣味だ

「これで良し」

似合ってるか？スイ」

「キュルル？」

「そりゃわかんないか…」

この馬車も盗賊も興味はないのでそろそろ出発するために馬車の通ったあとをもどり街道に出る馬車が街道から外れていたのは盗賊から逃げるためだろう

「さて、どっちに行く？」

「キュルルウ？」

街道に出たが、どっちに行けば町が近いかわからない

「探すか」

面倒くさくなったので空気の揺れを見てどっち方角に行けば町があるかを調べる

「こつちだな」

ここから南に3km行けば町がある。そこそこ活気があるみたいだ

じゃあ、行くか」

「キュルルイ！」

分子を使えば3kmなんて30秒で移動できるが、景色を見たり、魔物と戦ったりするのが旅だと思う。スイもいるし

そんなことを思っていると森から剣を持ったゴブリンが1匹出てきた。

はぐれメタルならぬはぐれゴブリンか？とふざけているとこちらを向いて走ってくる

「ゴギャアアアア」

とびかかってきた。

すぐに刀を抜き上から振られてくる剣ごとゴブリンを弾き飛ばす。

「キュイイイイ！」

弾き飛ばしたゴブリンにスイがウォーターブレスを放つ。

「ちようどいい、スイの能力でも見てみるか

行け！スイ！」

「キュアアア！」

スイは肩から飛び上がり空中で叫んだ。その瞬間にゴブリンが凍った

「マジか！」

素直に驚いた。

そして凍ったゴブリンに向かってスイが炎を吐き出す

「ファイヤーブレス！！」

どうやらスイは水と熱を操ることができるらしい

氷が砕けてゴブリンは倒れた

「キュウウ！」

スイは少し誇らしげに声を出すと俺の方に乗った

「よくやったな。」

そういつて頭をなでてやる。

「キュウウ」

気持ちよかったのか目を細めて手に頭を擦り付けてくる

竜種は種類によって使える魔法が決まっている。二つの魔法を使うことはない

だが何事にも例外がある

親同士の種類が違う場合だ

おそらくスイの親はウォーターリドラと熱を操るヒートリドラだろう

竜種には性別がない。繁殖は基本同じ種類の2頭の感素を混ぜて子どもを作る。

そのため違う種類同士で感素を混ぜても子供はできにくいのだが、スイの親は成功させたいらしい

ちなみに魔物は人間が使った感素が流れた残留から生まれる。町の中で魔物が生まれられない理由は常にいろんなところで感素が使われ続けているから残留ができないのだ。

閑話休題

スイをなでていると馬車が近づいてきた。どうやらさっきの戦闘を見られていたらしい

「お見事ですー坊や。

そちらのウォーターリドラも」

馬車から降りてきたデブな男がスイを見ながら言う

そろった鎧を着た護衛を3人引き連れてゆつくりと歩いてくる

「どうも。

ところであなたは？」

「いやいや、申し遅れました。

私、ラムスカ・フォン・ザクラスと申します。」

やはり貴族だった。しかも目がバルスツちやうのような名前だった

「どうも、ユナトです。」

「そうか、ではそのウォーターリドラを俺によこせ」

俺が貴族じゃないと分かった瞬間に口調が変わった。自分が一番偉いと思ってるタイプの貴族だろう。

「だってよ、スイ。あいつのどこ行くか？」

スイに聞いてみる

「キュウウー！」

首を全力で振るスイ

「だってき。

そんなわけなのでお断りします」

「そうか、なら銀貨5枚でどうだ？」

完全になめられている。

「いいえ。銀貨5枚くらいなら自分で稼げるので、それではさようなら」

「まあ待て、なら金貨1枚だ」

「結構です」

そろそろ鬱陶しいぞ？デブ

「ならいくら出せばいい？」

「そうですね…白金貨1000枚くらいですかね？」

「なツ！ガキが舐めおつてからに…」

お前ら、殺れ！竜は殺すなよ！」

やっと実力行使に出てくれた。最初からこれで来てくれれば楽なのに…

「おらー！」

護衛Aが舐めた顔して切りかかってくる。一人で十分とも思ってたんだろう。

「スイー！」

「キュウウー！」

スイに腕を凍らさせる

「なー！」

護衛Aが驚いている間に峰内で手首を打ち剣を飛ばし回収する。

氷を溶かし、首に峰打ちして気絶させる

「どうした？こんなもんか？」

さっきの護衛の顔から考えてこんな挑発でもすれば2人がかりで襲ってくるだろう。

「舐めやがつて…！さっさとやれ！お前ら！」

まさかのバ〇スさんが反応するという…

まあ襲ってくるのならそれでいい

相手は貴族なので正当防衛(仮)にしとかなないと権力で奴隷とか、悪ければ殺される。

いや、殺しに来た人全員消すのは簡単だけどね？さすがにね？俺にも良心があるしね？少しは心が痛むわけですよ。ついでに言えば犯罪者扱いされるし

閑話休題

護衛B、Cが俺の左右に立って様子をうかがってきてくる。これ以上ならみ合っても意味がないので挑発してさっさと来てもらう。

「どうした？来いよ。相手はガキ1人だぞ？」

ガキにおびえるような腰抜けか？貴族の護衛ってのはガキにおびえるような雑魚ばつかなのか？もしくはザクラス家はそんな雑魚しか雇えない貧乏貴族か？」

「野郎！」

「ガキが舐めやがって！」

右にいる護衛Bが剣を上げて突進してくる

左の護衛Cは剣を俺に向けて突進してくる

剣道で言うなら面と付きで両側から攻撃してくる。大人げないな
（棒読み）

自分を時間魔法で加速させて5倍で動けるようにして高速で首に峰打ち、気絶させる。

「なっ！」

バルスさんは俺を目で追いきれなかったようだ。おそらくワープしたように見えたんだろう。ワープは別の魔法だから…

「さて、まだやるか？ラムスカ卿」

「わ、わあああああ！」

腰を抜かして変な走り方をして馬車に戻っていった

「忘れ物だよ」

空間魔法で護衛3人を馬車の中にワープさせる

「ひい！」

バルスさんの悲鳴が聞こえてきた。

「さっ、さっさと出ろ！」

すぐに馬車が出発した

「あ、目がくするの忘れてた！」

ラムスカさんからするといい迷惑である

「スイを欲しがると思っていたが町に入る前に来るのは予想してなかったな

気をつけるぞ、スイ」

「キュ〜」

「あれ、なんか拗ねてる?」

「キュツ！」

「あれ〜俺なんかしたつけ〜?」

「キュウウウ」

フアイヤーブレスを吐いてきた

「熱いよ

何?もしかして戦いたかった?」

「キュウ」

頷いた

「1人倒しただろうが」

「キュウウ！」

「わかったわかった

今度から気を付けるよ…」

ずいぶん好戦的な竜なこと…

第7話

こういう大きな街に入るには身分証（冒険者ならギルドカード、商人なら商会の許可書、貴族や王族なら家紋）がいる。

身分証がない場合、小銅貨3枚で仮入場カードをもらう。仮入場カードがあれば、3日間その町にいれる。その間にギルドやら商会やらに行つて身分証を手に入れるのが一般的だ。

「ようボウズ。入場するんだろ？身分証は？」

門番の男がスイを見ながら聞いてくる。それでもスイについて何も聞かないとは・・・

こいつ、プロだ！

冗談は置いといて

「えっと…すいません、冒険者になりに来たんです。身分証はないので仮入場カードをいただけますか？」

「そうか、じゃあこの板に触れてくれ。」

「これなんですか？」

「まあいいから触ってくれ。これも仕事なんぞな。」

見たところ手汗に反応するうそ発見器っぽいが…

「どうですか？」

鉄の板に手をのせて聞いてみる

「おう、それでいい。」

んじや、今から質問するから正直に答えてくれ。」

「わかりました」

「じゃ、犯罪をしたことはあるか？」

「いいえ」

「ふむ、ならいい」

悪かったな、手間かけて。もう離して良いぞ」

「別にいいですけど、さっきのはなんですか？」

「ああ、こないだ領主が変わってな。

それで新しい領主が、神はこの街の平和を願っている！とか言つて、急に嘘が分かるとかいうアーティファクトを持ってきたんだ。

それをここに埋めて入場する身分証なしのやつらの犯罪歴を調べてるんだ。」

予想道理だった

つまり神様のおせっかいか。

「じゃ、雑談は終わり。仮入場カード代で小銅貨3枚だ」

パーカーのポケットにポーチから小銅貨3枚を移動し、手を突っ込んでポケットから取り出す

「これでいいですか？」

「OKだ、冒険者になりたいんだろ？ギルドはこの道をまっすぐ行ったらあるぞ」

「ありがとうございます」

「ああ、ところでお前ビーストテイマーなのか？」

聞いちゃった。プロだと思ってたのに…

いや、さすがに気になるか…

俺のジョブってなんだ？

剣も使えるし、魔法も使えるし、スイも戦うし、鍛冶もできるし、服も作れるし…

まあ普段剣使ってるから検視で良いや

「スイも戦いますが、俺はただの剣士ですよ？」

「ただの剣士はウォーターリドラと一緒に戦ったりしねえよ…」

「キュ〜」

そりゃそうだ

「まあいい。無駄に詮索すんのはマナー違反だしな」

「ありがとうございます。」

では、仮入場カード返す時にまた来ます。」

「おう、じゃあな」

「とりあえず、ギルド探すか」

「キュウ？」

「ああ、この道をまっすぐ進めばわかるらしい」

歩いていると大分視線を感じる。

まあ竜を肩に乗せた真っ黒な服着た日本刀を持つてる子どもなんてそういないだろう

5分程歩いていると、ギルドと書かれた看板の建物があった

「ここか…」

「キュウウ…」

あつたはあつたのだが…

建物が異様にでかいのだ

その辺の民家が3mくらいなんだが、ギルドは10mぐらいある。多分4階くらいまであるんじゃないだろうか

「まあ入るか…」

「キュウ…」

なぜこんなに大きくしたのか？と呆れながら入るとかなり視線が集まってくる。

そんなことは気にせず受付に歩く

「すいません、冒険者登録したいのですが…」

「年齢を教えてくださいいただけますでしょうか」

「10歳です」

「すいません、この街だと13歳以下の子が冒険者登録する場合試験を受けてもらい合格した子しか登録できないんです」

多分あの新しい領主の影響だろう。神様が俺を目立たせるために指示したに違いない。

ラノベオタクめ…

だが、そうなるかと実力を隠すのは面倒くさいだけだ。精一杯暴れてやろう

「別にいいですよ。」

「えっと、本当にいいのですか？」

「今まで10歳の子供が合格したことはないですよ？」

「別に大丈夫ですよ。多分余裕ですし」

「周りで休んでいた冒険者たちが大分驚いている」

「まあ今まで10歳の子供が合格したことがないのなら当たり前か」

…

「ええ？えっと、ではあちらの階段から3階まで上がってください。」

「わかりました」

「そういつて階段のほうに歩き始める」

「お前みたいなガキが冒険者なんてなれるわけないだろうww」

「階段の手前で、いかにも頭の悪そうな冒険者が絡んできた」

「お前その竜?!ウォーターリドラじゃねえか?!」

「どうせお前の命令なんて聞かねえだろ?俺が売ってきて金にしてやるよ。よこせ」

「テンプレが来た。今頃神様もテンションが上がっているだろう。」

「冷静に相手の装備を見る。剣を腰に差してはいるが鉄でできてる粗悪品だ。刃こぼれもひどい」

「あとスイを奪おうとするネタは前回やった」

「キュウ」

「相手をするのも面倒だし無視して素通りする」

「おい!無視してんじゃねえよ!」

「Cランク冒険者の俺様が言っただ!いうこと聞かねえと痛い目見るぞ!」

「Cランクだったの!?!」

「にしては装備悪すぎない?」

なんて呑気なことを考えつつ、高速で抜刀してテンプレさんの首に当てる。

「痛い目って、誰が？」

「いつだって俺はお前を殺すことはできるぞ？」

周りの冒険者も一緒に驚いて動きが止まった。

1秒ほど誰も動き出さなかったので刀を納刀して再び階段へ歩き出す

「貴様！舐めやがってエ殺してやる！」

「どうやらテンプレさんが再起動したようだ」

「まだやるんですか？」

「今みたいな奇襲しかできないくせに舐めやがって!!」

「そういいながら剣を上構えて突進してくる」

俺はすぐに抜刀して振り下ろされてくる剣を横に払ってテンプレさんの剣を弾き飛ばす

このままだとその辺にいた冒険者にあたってしまうので分子の動きを少しいじって冒険者にあたる前に落としておく

馬鹿みたいに口を開けて唾然としているテンプレさんに刀を向ける

「では、本気で殺し合いをしますか？」

テンプレさんは動かない

「最後に忠告ですどんな見た目の人でも一度は警戒して戦力を見るべきですよ」

「それでは」

「そういつて納刀し、今度こそ階段を上り始める」

「にしても鬱陶しい奴だった。1回やられたらさっさと実力差ぐらいわかれよな…」

「お前Cランクじゃないのかよ…」

「キュウ！」

「スイと一緒にテンプレさんをデイスリながら階段をのぼっている」

と3階に着いた。

3階には土が敷いてあり、壁には切り傷がいくつかあった

「お前が試験をするのか？」

部屋の真ん中に腕を組んで仁王立ちしている190cmぐらいあるおっさんが立っていた

「はい、ユナトです。よろしくお願いします」

「おう。俺はクラネスだ。ここで試験官をしてる

お前、歳は？」

「10歳です。」

「受付で注意されなかったか？」

「されましたね。」

「ならなんで受けた？」

「合格できると持ってるからです。」

「試験内容知ってるか？」

「知りません。たぶんあなたと試合でもするんでしょう？」

「お前なあ、そこまで予想できる奴がなんで受けてるんだよ…」

本気で俺に一撃加えることができると思ってるのか？それでもBランク冒険者なんだぞ」

「多分、余裕です」

「舐めてんのか？」

「舐めてはいけません。今もあなたの手と足の動きに警戒してます」

「……………まあいいけどよ。じゃあ行くぜ？」

どこからでもかかってきな。使えるものはなんだって使え？その竜でもなんでもな

それで俺が認めたら冒険者にしてやるよ」

そう言うとかラネスはわきに置いてあった木剣を拾い俺に向けて構えた。

「真剣でいいんですか？」

「当たり前だ」

「…わかりました」

抜刀して5 m程離れて構える

「行きます」

そう言っ
て俺の時間を加速して一瞬で刀をクラネスの首に突き立てる

「俺の勝ち、ですね。」

第8話

刀をクラネスの首に突き立てる

「俺の勝ち、ですね」

「負けた？」

「はい、俺の勝ちです。」

「俺が？」

「はい」

「10歳のガキに？」

「そうですね」

「俺Bランクだよ？」

「そうなんですか？強いんですね？」

「疑問形じゃねえか…」

「それで、試験の結果はどうなんですか？」

「そりゃ合格に決まってるだろ！あんな速い動き誰が止められるんだよ…」

「まあ確かにだれにも止められないスピードなはず、という設計ですけど。」

で、試験が終わったらどうすればいいんですか?」

「お前剣以外にできることはどれくらいあるんだ? それも見せてもらわ

痛い痛い、蹴んな! スイ: 戦いたかったのか?」

「キユウ!」

「わかったって、明日狩りに行くからその時にしてくれ。」

「キユウ」

「お二人さん? 話聞いてた?」

「あ、すいません。で、なんでしたっけ?」

「全く聞いてねえのかよ: 剣以外に何ができるんだって聞いてんだよ」

「えっと、スイと一緒に戦ったり、魔法使ったりするくらいですかね。」

「その身のこなしで魔法まで使えるのか: : : : : とりあえず魔法はなにができる?」

「なに、とは?」

「そりゃ属性に決まってるんだろ。ちなみに俺は火属性だ。」

属性!? なんだそれ!?

ふう、落ち着け、落ち着け、ということとはここでは使える魔法は一人一種類しかできないのか? 多分神様がわざと教えなかったんだろう。許すまじ

つまりすべての魔法が使える俺は全属性持ちになるわけだ。そういえばBランク冒険者の魔法がどれくらいなんだ? それが分かれば多少ごまかしようがある

「えっと: : 少し魔法見せてもらっても構わないですか?」

「なんだ? まあいいぞ。少し離れておけ」

「恵みなる炎よ、我が命をもって答えよ! ファイアボール!」

詠唱付きだった——!!

何それ？何その厨二感？え、マジで？マジで？詠唱とか絶対したくねえ！超恥ずい！

というかクラネス滅茶苦茶ドヤ顔なんだけど？直径20cmぐらいの火だったけど!!それくらい誰でもできるだろ！

「低級魔法使いなら俺も魔法だけで勝てるんだぜ？」

いや、低級魔法使い弱すぎだろ！

「火属性の専門宮廷魔法使いとかなら無詠唱でもうちよつと強い魔法使ってくるからな？これくらいで驚いてたらキリがないぞ？」

宮廷魔法使いでもうちよつとなのね……弱すぎんだろ！どんな魔法も無詠唱でできるわ！

というか専門つてことは宮廷魔法使いでも一属性しか使えないの？マジで

「国に一人は多属性使える奴もいるしな。」

よかった、まだ多属性持ちはあるのか…

「大陸1つに一人は全属性持ちいるらしいぞ」

えええええ！全属性持ちってそんな珍しいの!!というかクラネスさんめっちゃ語るな！なに？好きなの？宮廷魔法使いにでもなりたかったの？

「俺も子供の時は宮廷魔法使いにあこがれたもんだよ」

ねえ俺の思考読んでるでしょそうなんですよ？

「どうした？まだ驚いてんのか？」

驚いてるよ？この世界の魔法のレベルの低さに

「それでお前はどんな魔法が使えるんだ？」

全属性使えることは言ってもいいのだが、目立つのは嫌だ。あと詠唱は恥ずいからいやだ。

だが無詠唱でさえ宮廷魔法使いレベルだ。隠すのは無理がある。というかぶつちやけ隠すのも面倒くさい。

…勢いで全部言ってしまうおう。

そうと決まればもう自棄だ、とことん目立ってやろう。何なら勇者

みたいなことやってやんよ！

「えっと、全部です」

「なにが？」

「属性も、魔法も」

...

「えっと、もう一回言つて？」

「全属性の全魔法が使えます」

「嘘を付くならもうちよつとばれにくい嘘をついたほうがいいぞ」

「本当ですよ？見せますね？」

多分信じてもらえないし

とりあえず静電気を手から出しながら30cmぐらいの火を浮かべて見せる

「無詠唱で、並列の魔法使用だど!？」

そこで驚かれるのか？多属性持ちならできそうな気がするがな？

静電気と火を維持したまま水を出し、窒素を変換して剣を空中に作成、浮遊させる

光をの粒を操って真つ黒な球状の空間を作ったり、水素を作つて火をつけて爆発させてみたりと色々見せる

「どうですか？」

「お、お前…全属性というか…何でもありというか」

声量がちよつとずつ下がってる。本気で驚いているようだ。

そうなるともうちよつと驚かせたくなるよなく(ゲス顔)

「ほかにも…」

空間魔法を使ってクラネスの後ろにワープする

「こんなのとか」

「!？」

「こんなのとか」

俺の周りだけ無重力にして宙に浮く

「!?!?」

「これくらいならできますよっ。」

クラネスの動きが止まってしまった

「あれ? やりすぎた?」

スイと戯れること5分、ようやくクラネスが再起動した

「何の魔法使ったんだ?」

「だいぶ落ち着きましたね」

「いや、驚きすぎて逆に冷静になっちゃっただけだ。それで何の魔法で宙に浮いたり瞬間移動したんだ?」

「試合した時とは明らかに違ってたぞ」

「俺の動き見えてたんですね…!」

「流石に戦闘経験のない貴族とは違うか…」

「さつき使った魔法は空間魔法です。浮いたのは重力魔法」

「さて! その空間魔法ってのはなんなんだ? 1つずつ説明してくれないと混乱する」

「そこからなんだ…えつと空間魔法は文字道理、空間を操る魔法です。ワープしたり異空間を作ったり。誰にでもできますよ?」

「そんなえげつない魔法を誰でも使えるんだったら冒険者全員Sランクだよ…」

「全員使えるんだったらそれが平均になるんじゃないですか?」

「それもそうだな。 じゃねえんだよ!」

「何? あんなこと誰でもできるとでも思ってたの!?」

「いや別に」

「お前な……………」

「重力魔法も文字道理重力を操る空間魔法の派生です」

「そもそもその重力ってなんだ?」

「そこからなんだ……………」

えつと……………やって見せますね? 今からクラネス産の周りだけ

重力を強くします。ちよつと我慢してください」

「は？つてうおおお!!?!なんだこれ!!立ってられねえぞ!!」

「その自分の重さが重力という力によって生まれてるんですよ」

「わかったからちよつと弱めてくれない？立ってるのも大変になってきたよ?」

「で、俺がどうやって浮いていたかというとその重さをなくしたんです。なくしますね?」

「うおおお!!痛っ」

「あ、すみません足の力抜いてください」

「先に言え!」

「切りますね」

「はあやつと終わった…」

いとも簡単に誰もできないことを何でもないように…宮廷魔法使いにもなれるんじゃないの?」

「結構です。さつさと冒険者登録したいんですが…」

「即答かよ…ああ、ちよつと待っててくれ」

「あ、はい」

「待たせたな

ちよつと推薦状とってきた」

「そんなのあるんですね」

「ああ。あとはここにお前が名前書けばいい。Aランクになれる」

「ちよつと待ってください、聞いてないんですけど、Aランクになるつもりもないんですけど」

「逆にお前がBランク未満にするのは俺が嫌だ」

「自分の事情なんですか…とにかくAランクになるつもりはないです

なるならCランクぐらいで良いです。というかそれより上の推薦は受け付けません」

「頼むよ…俺のために！お前みたいにてたらめに強い奴はAランク推薦しないと俺の評判もかわるんだよ…！」

「知りませんよ。本人がAランク推薦受け付けないことを言い訳にしてください。それでもだめなら強硬手段に出ます。具体的にはギルドの資金をちよつとずつ盗みます」

「わかったよ。その辺のコソ泥ならともかくお前ならだれにもばれずに盗むことができそうで怖いからやめてくれ。」

で、Cランクは受けてくれるんだよな？」

「はい」

「それじゃ……………」

AランクからCランクに書き換えたから名前書いてもいいか？」

「自分で書けますよ。そのペン貸してください」

「ああ、はい」

解析…完了、ついでに紙とインクもコピーしておく

「ありがとうございます。それじゃあこれ持って1階の受付に行けばいいですか？」

「ああ。俺も付いて行くよ。流石に10歳のガキに推薦書いたとなると説明があるだろう」

「それもそうですね。じゃあ行きますか」

第9話

試験でクラネスさんを瞬殺していろいろ魔法を見せたらなんか上位ランク登録の推薦をもらった

そういう訳でCランクにしてもらいにクラネスさんと一緒に1階に戻ってきたのだが…

「す、推薦だと!?」「でも10歳のガキだぞ?」「クラネスさんが負けた!?」「どうせ金でも使ったんだろ」「でもさつきCランクのやつ撃退してたぜ」「マジかよ」

なんかざわざわしてる…

どうもあのCランクの雑魚がのぞきに来ていたらしく、クラネスさんを瞬殺したのを見たらしい。その後、気になった奴が5人ほどいて、のぞきに来た時ちょうど推薦の紙を取りに行ったクラネスさんを見つけて戻って大々的に広めてしまったのだ

全く、面倒なことを…

「なんでこうなった…?」

「キユウ!」

お前は何でノリノリなんだ? スイ

「まあしょうがないか…」

もう魔法のレベルが低すぎた時点で目立たないのは諦めた

「何突っ立ってんださつきと行くぞ」

「いや流石にこの光景は想像してないでしょ、目立つのは好きじゃないんですよ」

「宮廷魔法使いにも慣れる奴がなに言ってるんだ、俺も10歳のガキに負けるなんて初めてなんだよ…」

ここにきてまだ爆弾発言をして来るか!? なんか周りの視線すごいことになってるから。あんたが負けたことを認めたら疑う人いなくなるから。

「おいクラネスさんが認めろ」「あのガキそんな強いのか?」「だから言っただろ? 高速で刀をクラネスさんの首に突き付けたんだよ」「そりや疑うにきまつてんだろ」「というか宮廷魔法使いって行ったよな

「今」「魔法も使えるのか!」「多属性持ちとか?」「さすがにねえだろ」
ほら、また面倒くさいことになった。

「はあ」

「キュウ?」

「何ため息ついてんだ? さつさと行くぞ」

「はくい…はあ」

「で、ではCランク冒険者として登録しますね?」

受付のお姉さんが滅茶苦茶動揺しながら確認する

「はい、お願いします」

「そ、それでは少々お待ちください」

ギルドカードを作るとき推薦でDランク以上で登録する場合5分ほどかかるらしい。

しかし5分待つということは…

「おい! ガキ! 俺と勝負しろ!」

こういうことになる

なんとなくだれか勝負吹っ掛けてくるだろうとは思っていたけどね?

さて、ここでこいつをぼこぼこにするのは簡単だがぎりぎりで負けることで少し目立たなくなるだろう。

だが、クラネスさんが小さい声で「見せつけてやれ」とか言ってるし、クラネスさんの前で負けるとクラネスさんがあとで面倒くさそうだと。ということでは生贄になってもらおう

「別にいいですよ、ただ少し狭いのでちよつと準備だけしますね」

その辺の邪魔の人たちと椅子や机をどかす

あ、やっちゃった。スペースを確保するためにやったことなのにみんなの目が点になってしまった。ほんとに目って点になるんだね、

ちよつとびつくりしたよ

「それでは始めますか。先手は譲りますよ」

刀を抜きながら挑発する

見た感じだところいつの装備は盾持ち片手剣だ。防がれることはま
ずないと思うが一応念には念を入れて突進するのはやめる

「チっ舐めやがって」

舌打ちしながら背中へ背負った剣を抜きたてを構えてくる

盾を前にして突進してきたので少し光の動きをいじって俺を見え
なくする

「どこ行きやがった!!」

俺が見えなくなつたので警戒したのか止まって周りを見まわす。
どうでもいいが、周りの人たちは馬鹿を見るような目で盾持ちを見て
る。そりや目の前にいるしね

動きが止まれば後はいつもどうり固有○操作で刀を突きつければ
いいだけだ。

だが毎回同じは芸がないので今回は後ろに回り込んで刀の腹をの
どに少しあてた

「ここですよ？降参してくれますか？」

「っ…参った」

「ありがとうございます」

「見えたか？動き」「ギリギリ」「俺は見えなかつた」「早すぎるだろ」「ク
ラネスさんに勝つただけあるな」「勝てるか？」「無理だろ」

固有○操作でそんなに早いな。見えてる人が案外少ないこと
に驚いてる

「さすがだな」

「いえいえ、大したことはないですよ？」

「いや、あいつはコルネアルっていうBランク冒険者でな、あまり目立
たないが結構強い、俺も勝負したら勝てるかどうか微妙なところだ」

なんでまたそういう面倒くさいことになるかなー、Cランクのまま
でいたいんだけどなー

「じゃあ俺はこの辺でこの後もやることがあるからな。また会ったらよろしく頼むぜ」

「はい、ありがとうございます」

「おうよ」

「ユナトさん、ギルドカードができました」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「はい。それではこれからもよろしくお願いします」

そんな感じでとりあえず冒険者になれた

あとこの街でやることは…

「おい、ガキ」

コルネアルさんが話しかけてる

面倒くさいし無視しよう。で、あとやることは仮入場カードを

「おいー」

返して、宿をとって

「おい!!」

肩をたたかれたらさすがに無視できない

「あ、はいなんででしょうか?」

「お前さつき魔法を使っただろう」

流石にBランクなだけはある。そこに気づいたのはこいつが初めてだ。クラネスさんはどうなんだろう?

「ええまあ」

「だから何者だ?」

「何者といわれましても、ただの剣士ですよ?」

「御託はいい、どこから来た?何の魔法を使った?」

「どこからですか?ネスティア大森林ですね。使ったのは光魔法と時間魔法です。そろそろいいですか?この後用事があるんですけど」

「ネスティア大森林だと?!あそこはフォレスト・ベアがうじゃうじゃ

いるところだぞ?!そんなところか」

「マジで日が暮れそうなのでもう行っていいですか?」

「あ、ああ。ここからが本題なんだが、俺のパーティに入らね」お断りします」えか…

まあいい、じゃあな」

「あ、はい、さようなら」

それじゃあの門番さんのところに行くかな

「お、もう帰ってきたのか」

「どうも、返しに仮入場カード返しに来ました」

「了解。早かったな、試験があっただろ?」

「ええ、まあ。余裕でしたよ。仮入場カードです」

「そうか。ほい、確認しました。んじゃギルドカードを見せてくれ。それで入場完了だ」

「はい」

「つな!Cランクってどういうことだ!」

「ああ、クラネスさん倒したら推薦もらえました」

「マジか!あのクラネスさんをか!ただのガキじゃねえとは思ってたが流石にウォーターリドラを連れてるだけあるな」

「どういうことですか?」

「ウォーターリドラは本能的に強い奴になつきやすいらしいんだ。まあ噂だけだな。」

「へえ。そうなのか?スイ」

「キュウウ?」

よくわからないっぽい

「まあいいか。それじゃあな」

「はい、それでは」

あとは宿を探すか

とりあえずあたりを見回して一番大きな建物…やっぱりギルドか
「んじや行くか」

空を飛んでギルドの屋上に行く

「うつへく高いなく」

そんなことよりも宿の看板は…あつた！さて…あ、そうだ」

「キュウウウウウ？」

「いやつつっほー…い！」

どうせ高いところから落ちるならスカイダイビングしよう！という謎の思い付きをした俺は全速力で上昇して多分高度10000mぐらいまで昇った

そして絶賛ダイビング中だ。肩の上にいるスイも一緒に

「キュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」

なんかちよつと泣いてるように見えるけど気にしない

昇り終わったときに気づいたけどこのまま落ちるとクレーターができること間違いない。まあもとは戻せるけど

減速すればクレーターはできないのだが、落下速度が落ちるのはつまらないし、地面すれすれで急ブレーキするとGで死ぬ

けど落下速度を落とすのはつまらないので他の方法を考えているのだが全く思いつかないし、考えていない

マジでどうしよう

あと30秒で思いつかないと死ぬ

うーん

やばいなく

どうしよう

思いつかない

仕方ない遅延しよう

落ち始めた場所にワープして考える

「キュウウウウウウウ!!」

あ、ごめん。考えるのに必死すぎているの忘れてた、付き合ってもらうZO☆

しようがないのでクレーターを作つてすぐに直す方向で行こう。とりあえず半径5mぐらいのスペースを作らねばならん。人除けをするか？いや、逆転の発想で行こう。着地するスペースがないなら作ればいいじゃない。鉄板を作つて建物の屋根よりちよつと上ぐらいに浮かせておく。10cm間隔で20枚ほど浮かせておく。瓦割り(鉄)×20をすればさすがにクレーターはできないだろう。ということでもラスト20秒ほどのダイビングタータイム！

「ヒヤッホオオオオオウ！」

「キュキュキュ！キュキュキュ！キュツキュウキュウ！」

なんか言ってる。まあいいや

そのまま鉄板の中心に向けて硬化したライダーキック(仮)を当てるとゴキン！という金属音がして鉄板が割れる。さすがに高度1万mから落下してきた速度には敵わなかったようだ。だが1枚割ったところで大して落下速度は減らない。そのまま鉄板を17枚まで割ったが18枚目は割れなかったので割れた残骸と残った2枚を消して普通に地面に着地する

着地した瞬間にスイが5Lぐらいの水が降らせる。周りへの被害を考えてほしいものだ

俺の頭上を中心に半径3mぐらいの範囲を120℃にして蒸発させ、水蒸気を窒素に変えて蒸し暑くならないようにしておく

「もうちよつと考えて打てよ。周りの人に被害が行くだろうが」

「キュウウウ！」

「悪かったって、あとでなんかあげるから」

やばいものを見る周りの視線が少しイラつとしたが無視することにしてとりあえずギルドの上から見つけた宿屋のドアを開けた

第10話

……見られている

宿屋に入って少し見まわしたら店内はそこそこきれいに掃除されていておくに食堂のような場所も見える

そしてカウンターにいる：多分15歳ぐらいの女の子に見られている

それはもう、めっちゃ見られている

具体的には驚きとか困惑とか恐怖とか、いろんな感情を視線にこめて訴えてくるように全力で、ものすごく凝視されている

とても話しかけずらい空気ではあるがとりあえずさっさと休みたのでカウンターにいる子に話しかける

「すみません、一晩泊まりたいんですが…」

：反応がない　ただの屍の様だ

なんて冗談は置いておいて。マジで何の反応もない、微動だにせず俺を凝視している

「あの…」

「あ、はい。なんででしょうか？」

再起動しようだ

「一晩泊まりたいんですが：一番良い部屋だで夕食と朝食込みでいくらぐらいになりますか？」

「えっ?! あ、はい。銀貨3枚です。」

「銀貨3枚ですね」

「あ、ありがとうございます。部屋は2階の一番奥の部屋です。ご飯はあちらの食堂で食べるので別料金です」

「ありがとうございます」

困惑しながら話すカウンターの子に札を言っただけで階段を上る。鍵を渡されなかったのでおそらくチェーンロックがあるんだろう、多分そんなことを考えつつ廊下を歩いて一番奥の部屋に入る

中に入ってみるとトイレも風呂もあるようだ。トイレは便を直接消すことができるのでいらぬのだが、風呂はともありがたい。異空間に作ることはできるけど作るのは面倒くさい。(とはいえ30秒で作れるが…)

ついでに言うとチェーンロックはなかった。代わりに学校の個室トイレのロックと同じようなものがあった。なんだろうこの、これじゃない感

閑話休題

「ふう」

奥のベットに転がって溜息をつく。さすがに疲れた

「キュウウ♪」

スイはベットの寝心地がいいのか気持ちよさそうに丸まっている

今日初めてこの世界の人間と関わって、殺した

対して後悔もないし罪悪感もない。いくら盗賊を殺したといっても普通の人間なら罪悪感ぐらいは出ると思うのだが。魔物を殺した時にも思ったがやはり俺は殺すことに慣れてるようだ。だとしたら地球での暮らしが関係していると思うが…軍人か、殺し屋か。まあどうでもいいか

そう思ったところで窓に何か当たった。

石でも投げられたのかと思ってみてみるとそれはの封筒だった

開いてみると

「じゃじゃーん。みんな大好き! 神様だよ〜!」

帰れ

切実にそう思った。今日の昼に処分した石からでてたホログラムのやつだ

石からしか出せないわけではなかったのか…

「まあ冗談は置いておいて、おーちゃんと出会えたみたいですね。よかったです」

はあ？何言ってるんだ

「そのウォーターリドラ、スイちゃんは福引の2等の方なんですよ。龍になってみたいなんて言う変な人がいたので主人公があう小さい希少価値のある竜にしてみました。異世界転生ものっぽいでしょう？」

「キユウー」

そういつて敬礼するスイ。可愛い

お前、前はくじ引きって言ってるなかつたか？どうでもいいけど

あとスイはどんな能力を付けたんだ？お前のことだから変な能力付けたんだろう？

「いえいえ。〃希少価値のある竜〃なのであなたの知る能力しかありませんよ」

あっそ

で、本来の目的は？

「察しが良くて助かりますね〜今来たのは2つ依頼があつてですね

1つはある人を殺して、いえ消してほしいのです」
消す？殺すんじゃないくて？

「ええ、あなたと同じ知識を持つ者です。」

つまり、感素が元素に影響して魔法を出していることを知ってるってことか？

「そこまで正確ではありませんが、物に干渉できることまでわかっています。私が出向いてもいいのですがあまり世界に干渉しすぎると少々問題が…」

その割には俺に干渉しまくってるじゃないか

「それはあなた個人に干渉してるので問題ないのです」

無茶苦茶だな…

で消すっていうのは？

「その人はですね。自分の体を複製したんですよ。今活動してる体が死ぬと魂が次の体に移動してしまうのです。それで殺しても殺しても成仏しないんですよ」

なるほど。どこぞの人形師みたいのものか

そいつを消さないといけない理由はなんだ？

「魔王を作り出そうとしているからです。魔王を作って災害を起こしてみたいとかいう破壊的思考を持っているので。これから起こる大災害を未然に防いでほしいのです。」

地球も今みたいに助けられなかったのか？

「それを言われると痛いですが、あなたみたいに干渉できる個人がいなかったんですよ。」

まあそれは別にいいんだが。で、どうやってそいつを消せばいい？
「魂魄魔法です。要は魂が次の体に入る前に魂を成仏させればいいのです」

ちなみにその魂魄魔法を使える人ってこの大陸にいる？

「いませんね。東の大陸にいます。1人だけ」

また珍しい魔法を俺に伝授しようとしてるのか？案枚目立ちたくないんだけどな

「ギルドであんなにやらかしておいてそれはないでしょう」

まあそれもそうだな

で使い方は？

「分子を操る時と大体同じですよ。感素を動かすんですよ」

それって矛盾してない？

感素で感素を動かすのか？

「そうじゃないんですよ感素で動かすのではなく、直接動かすんですよそれは分子とはだいぶ違う気がするが…」

「感覚は同じです。感素はもつと小さいので大分集中しなければいけません、処理能力が人の何倍もあるユナトさんなら余裕でしょう」
ん、ああなるほど。こんな感じか。確かに感覚は分子と似てる

「習得するの早すぎませんか……まあいいですそれを自分の目につけ

るのです。というか目と感素を同化させるのです。それが一番楽な方法ですから」

同化？

「目の中に常に大量の感素があるようにするのです。そうすると視覚に影響して魂や精霊が見えるようになります。ついでにいろんなものも見えます」

なるほど。これが魂か…

そういうことか！それであとは弱点というか、死線を斬ればいいわけだ。

「そうです！直〇の魔眼です！そうすれば成仏します。ついでに言う感素のない空間では魔法が使えません。つまり魔法を消すことができるのです！」

うん。それはなんとなくわかってた

でもう1つの依頼ってというのは？

「これは簡単です。神器を回収してほしいのです。カルテウスは壊れなくてなんでも切れるだけなので大したことはありませんが、そこそ核みたいな能力もある神器もあるのです。地上に置いておくのは危険なので見つけてこの紙の上においてください。そうすると私のいる場所に転送されます」

報酬は？

「説明終わってすぐにそれですか前者はと魂魄魔法。後者は…」

じゃあ設計図だ。全ての元素の設計図をよこせ

「はあ。別にいいですけど。じゃあそれでいきましようすぐ渡しますが、いいですか？」

ちよつと待ってください。

N+5個ほどつけるから

「便利ですね…」

出来たぜ？じゃあ頼む

「はい」

いつもどおり情報が滝のように流れてくる

「これでOKです。それで要件は終わりです。ではよい人生を」

ああ、じゃあな
また新しい魔法を覚えたが、かなり使えそうだな…
依頼めんどくせえな…

第11話

神様の依頼のせいで面倒くさいことになった

正直俺はさっさとお金をためていい感じの家を買って、または建てて、そこでのんびり暮らそうと思っていた。そのために冒険者になつたのに神器を回収するためにそれなりに移動しなければならぬ。

定住することは難しそうだ。せめての場所が分かればいいんだが、さすがに神様もピンポイントでわかるわけではない。そうなるとうしても旅をして、その場所で聞き込みやら調査やらをしなければならぬ。正直面倒くさいが流石に魔法を報酬にされては断れない。

「はあ」

溜息をつきつつ、飯を食べるために腰にさしてある刀をポーチにしまつて、布団でごろごろして遊んでいるスイを捕まえる。

「飯行くぞ」

「キュウウー」

おながが減っていたのか嬉しそうに鳴いてから俺の方に乗った。

1階に降りて奥の食堂に入る。意外と人が多いことに驚きながら近くの席に座る。机の上にメニューやベルがあるとところを見るとレストランのような注文方法らしい。

メニューを見たが知らない単語が多い。神様にもらった知識はどうも偏っている。次あつたら苦情を言っておこう。

名前だけではどんな料理がよく分からないので適当におすすめても聞こうと思ibelを鳴らす。すると店員が来たのだが…あのカウンターにいた俺を凝視してた子だ。

「あつ」

また凝視し始めたようだ

「あのくおすすめて何ですか？」

まあそんなことどうでもいいので無視しておすすめて聞いてみる

……

全く反応がない。

イラつとしたので、全力でデコピンしてやった

「痛!!」

うずくまって額に手を当てている。

わざわざ魔眼を使って、デコピンされて一番痛いところを探してデコピンしたのだ。そりゃ痛いだろう。

「あのくおすすめて何ですか?」

だがそんなこと無視しておすすめを聞く。話を聞かないほうが悪い。

5分ほどたって、ようやくカウンターの子がたつた。そんなに痛かったのか：今度から対人戦これ使おう。

そんなことを考えていると再起動したカウンターの子が俺を見て言った。

「デコピンする必要はないじゃないの!」

「ここのおすすめて何ですか?」

無視したけど。

「無視すんな!」

「先に無視したのはそっちでしょう?俺が気になるんだつたら聞いてみればいいじゃないですか。」

デコピンした理由はここに入った最初からずっと凝視されてていらつたしたので

で、この食堂のおすすめて何ですか?」

「ぶれないのね：おすすめはトルケノ揚げ定食です。」

急に口調戻つた：まあいいか

「じゃあそれください」

「かしこまりました。銅貨3枚になります。」

そういいながらカウンターの子は持っていた四角いトレーみたいなのを机に置いた。

多分この食堂は注文をもらった時点でお金を支払うのだろう。レジなんてあるわけないし

「はこ」

何もないポケットに手をつ突っ込んでポーチから銅貨3枚出してトレーに置く

「ありがとうございます」

そういつてカウンターの子は戻っていった

「面白いな。」

「キユウ」

中身が地球の人なスイはとても頷いている。

「でもこうすると食い逃げできないのか」

「キユウウウ」

確かに、と共感したようにスイが頷く。

「キユウ」

眠いのか、俺の方を降りて俺の膝上に丸まって休んでいる

スイを撫でて待っている

隣の机にいた、剣を腰に差し、チェストプレートだけ付けたいかにも冒険者っぽい格好のおじさんが話しかけてきた

「ウォーターリドラを連れているなんて珍しいね」

「まあ、そうですね。これでもドラゴンですし」

「急に話しかけてごめんね。僕はリンヤっていうんだ」

「どうも、ユナトですこっちはスイです」

リンヤの机を見たところ4人パーティらしい。装備は一級品では

なさそうなのでDかEランクだろう

「ユナト君は、一人で旅をしているのかい？」

「はい、こいつと一緒に」

「すごいね、若いのに。大変でしょう？」

「そんなに大変でもないですよ？雑魚をちまちま狩ってるだけでそこ

そこ収入にはなりますからね。しかも報酬分配もなくて楽ですよ。」

下手に勧誘されてトラブルになるのは面倒くさいので先に1人で

やっていけることを言っておく。頭のいい奴ならこれで勧誘はし

ないだろう。でませだけど

「そうなのかい？でもパーティ組んだほうが楽なこともあると思うよ

？」

？」

「いえいえパーティに足手まといは要らないですから」

これは本音。下手に弱い奴と組むより1人でやったほうが効率的だろう

「君がかい？ウオーターリドラを連れてくる子が足手まといなんてすごいパーティにいたんだね」

なんか曲解されているらしい。俺のことを何歳だと思っているんだろう？

「君、よかつたらうちのパーティに来ないかい？ウオーターリドラを連れてくるんだ、強いんだろう？」

やっぱりパーティ勧誘だった。正直俺より強い奴がこの世界にそんなに大量にはいないと思っっている。事実Bランクのクラネスさんに勝ったわけだし。カルテウスを使えば大体のやつには勝てると思う

そのうえでこんなEランクのパーティに入ったところで、こいつらが足手まといにしかならないことは容易に予想できる。

「パーティについてはお断りさせていただきますね。1人のほうが気楽で良いんですよ。宿代1人分で良いし」

もつと言えば俺は人にばれたくないもことかなりあるのでそれも込みで、1人は気楽だ

「でも、パーティだと見張り番を交代できるよ？」

パーティでのメリットを提示したいんだろうが、普段は野宿の時は異空間に入るので見張りは要らない

「いいですって。野宿しなければいい話でしょう。」

「魔物がいっぱいいたとき全部一人で倒すのは大変だと思うよ？」

余裕だ。何なら魔物全員を動かすことすらできる

「訓練になるじゃないですか。なればいだけの話です」

「とても強い魔物が出たら一人で倒せるのかい？」

多分倒せるし、消すことができる俺にとっては、倒せない魔物はな

いと思っっている。

「勝てなそうな相手とは戦わないですよ」

「子供が夜1人で寂しくないのかい？」

精神年齢は大人なので大丈夫です

「いいえ全然。スイもいますし」

「でも」

「あくもう！パーティに入る気はないですし、そもそも俺はCランクです！そんなに心配されるほど弱くはありません！何なら模擬戦でもしますか？」

言い切ってから気づいた。ここには俺ら以外にも人がいることを忘れていた。大声を出したせいで俺のランクがばれたし

「Cランク？嘘はよくないよ、僕らもランクはDなんだから」

「本当ですよ。ギルドカード見ますか？」

「貴族の方かい？フルネームは？」

ここまで追求してくると怪しい、多分スイをマスコットにしたいんだろうなーぐらいに思っていたのだが。

「違いますよ。はい、ギルドカードです。よく見てください」

そういつてギルドカードをリンヤに見せる

5秒ほど停止したリンヤは

「う、嘘だ！偽装しているに違いない！この俺様がDランクなんだぞ！こんなガキがCランクなはずがない！」

こいつ何言ってるだろう…

「ザクラス様直属のこの俺が！まだDランクなんだぞ！こんなことあつてたまるか！」

あくなるほど、あのバ〇スさんかまだスイを狙ってたらしい。

こいつがDランクということはあの時の護衛はEランクくらいだろうか？

なににせよ、これ以上喚き散らされるのもこの店に迷惑だろうし、さっさと処分するに限る

「スイ、起きろ。」

「キユウ？」

「ちよつと出てくるから席確保しておいてくれ、料理が来たら先食べていいぞ。全部は食べるなよ？あと、お前を狙ってるやつがいるかもしれない、襲ってきたら容赦なく凍らして良いぞ」

「キユウ」

そう鳴いて頷いたのを確認するとリンヤを見る

「表に出ろ、お前がDランクな理由を教えてやる、何ならパーティ全員でかかってきてもいいぜ？」

軽く挑発して、模擬戦をさせる。ついでに恐怖を刻み込んであのラムスカ卿に狙われないようにしなければなるまい

「クソガキ、絶対に許さねえぞ！来い！お前ら」

怒りがにじみ出たような声だ。あの護衛もそうだったけどラムスカさん家の人は沸点が低い。これだけの挑発でこんなに怒ってくると相手をするのが楽だ。この店を出ると外は暗くもうよるらしい。

リンヤとその仲間が出てきたので、ポーチから刀を出し、抜刀して5m程離れる。

普通に戦って負ける気はしないので、4対1にすることにした。だからといって負けるわけではないのだが

「いつでも来いよ、4人まとめてな」

「クソガキー！」

相手の装備はリンヤが両手剣、仲間A、Bが盾持ち片手剣、仲間Cは弓矢持ちだ

Cがしよっぱなから俺の頭を狙って矢を放つ。難なく矢を切り捨てると、すぐにA、Bが両サイドから、リンヤが正面から突進してくる。

とりあえず左右から来たAとBの剣を手を強化してで受け止める

次に魔眼を使ってリンヤの剣の、死線を蹴り上げて破壊する。

すぐさま両手で受け止めた剣を折りそのまま突っ込んでくるAとBを盾にCの矢を防ぐ、チェストプレートにあたったはずなので死にはしないはずだ。

そのままAとBを投げ捨て唾然としているリンヤを蹴り飛ばし、Cの弓を切り捨てる。

これで終わり。でもいいのだが、ちょっと怖がってもらわないとラムスカさんに付きまとわれる。気持ち悪いので二度と手を出したくなくなるようにしなければならぬ。

ということでもリンヤの一番痛いところを探し、そこを即席で作った針を使い刺しまくる。

普通なら絶叫が聞こえるのだろうが、音の波を消しているのだから叫んでも俺にもほかの人にも聞こえないし仲間A、B、Cは気絶させてあるので助けも来ない。

5分程刺し続け、漏らし始めたところで解放した

するとすぐさまA、B、C、を置いて走って行ったのでラムスカさんのところに行ったのだろう

A、B、C、を運びながら屋根の上から追跡してリンヤが到着した屋敷の玄関に気絶したA、B、Cと“次襲われたらどうなるか、わかるよな”と書いた紙を置いておいたので、多分怖がつてくれるはずだ。

スイをあきらめてくれるといいのだが

第12話

ラムスカさん家の下っ端を返却して宿に戻り、食堂に行く。

スイのいる席を見てみると、唐揚げのようなものとご飯のようなもの、あとは何かのスープのようなものもある

おそらく唐揚げのようなものがトルケノ揚げだろう。何を揚げたのだろうか？

しかし意外と量がある。これで3百円というのだから驚きだ。

まだスイが椅子で丸まっつてるところを見ると食べ始めてはいないらしい

「食っていいって言っただろ？」

「キュー」

スイを抱き上げながらそう問うと少し呆れたように返事をした

呆れらるようなことをした覚えはなかったのでよくわからないが、なんにせよ待ってくれていたのは嬉しいので気にしないことにする。

箸を探すが見つからない。流石に箸はないらしい。

仕方がないので適当に箸を作る。フォークを使ってもいいのだが、なんとなく少し違う気がする

スイの分を少し分けて、合掌して挨拶をする

「いただきます」

「キュー」

実はこの世界に来てから初めての食事だ。今までは体内に直接栄養を作っていたので味のあるものを口にするのは初めてなのだ

我ながらバカみたいな生き方してきたな…

閑話休題

このトルケノ揚げとやらを一口かじってみる

サクツといい音がして、中からジューシーな肉汁が出て来る。をしってプリツとした肉の触感がして舌に肉のうまみが広がる。

これは……………なんというか……………完全にから揚げだ

スイもかなりご機嫌で次々にトルケノ揚げ改めから揚げを食べていた

今まで10年間一度も食事をしていなかったの、胃が縮んだのかあまり量が食べれなくて一人前なのにスイを半分に分けても満腹になった

「あんた強いわりに小食なのね」

食べ終わったのを見計らったかのようなタイミングで例のカウンターにいた子が話しかけて来た

「どうやらこの子はさっきの模擬戦（笑）を見ていたらしい。まあ別にいいのだが。」

「びつくりしたわよ、急に空中に板が現れたと思ったらそれを割って子供が落ちてくるし、しかもすぐに板が消えるし。そしたら大量の水が降ってきたと思ったら消えて。そのあと何事もなかったかのよう普通に歩いてうちに入ってくるんだもの。」

「ちよつと怖かったのよ?」

開いた皿をトレーに乗せながら彼女はそう言った。

確かに下から見ると突っ込みどころとかそういう問題じゃないレベルでいろいろあったのか。すごいことしてんな俺

「そうですか」

正直どうでもいい話題なので適当に流す

「それにしても強かったわね」

剣を蹴って壊すとか意味わかんないわよ。あんた何歳なのよ?」

「ありがとうございます。歳は10ですよ。それでは、ほら行くぞスイ」

「え？今雑談する流れじゃなかった？ねえ？無視しないで？」

うるさいけどとりあえず無視してスイを抱きかかえて食堂を出る

部屋に戻ってスイをベットのの上に置いて自分も適当に部屋着に着替える、というか作る。作って寝る

知らない天井だ：

嘘ですごめんなさい1回やってみたかったです本当に申し訳ございません

by 作者

ポーチから時計を出す。6：24

「早いな」

地球にいたころからこんな時間に起きてたんだらうか？何やってたんだろ

スイはまだ寝てるようなので起きるまで暇だ、暇だし武器でも作る

とりあえず5分で200個ほどいろんな形の刀剣類、竿状武器を作る。

トマホークとかハルバードとかグラディウスとか形だけ作った。ちやんと部品一つ一つ作ると疲れるからね

それでも5分しかたってないしスイも起きないので今使ってる刀を改造しようか

最初に造ったときはまだ紐の素材が分からなかったので柄も金属なのだ。

紐を使ってちゃんとした柄を作ってみたかったのだ

分子で紐を編んで行く。あとはなるべく鏢を奇麗にと思ったのだ

があんまり思いつかなかったので普通にした。

鞆もあまりちゃんと作ってなかったのでカーボンを使って作った。そろそろめんどくさくなってきたのでこんなもんで良いか

時間を確認すると7:15だったのでそろそろスイを起こす。さつさとこの街を出て次の街に行つて情報収集したい。お金は盗賊から盗った分もあるし何なら作ることも可能なのでその辺は無視できる

さつさと神様の依頼を終わらせてどっかの森に小屋建ててのんびり暮らしたいからね

そんなわけなのでこんな時間からギルドに行くのであった

第13話

ギルドに着いた

まずここ一帯の地図が欲しい。ネステイアの森のほかは何があるのか、あと一番近い街が知りたい

これはギルドのカウンターで売られていたので問題ない。買っていないけど

あとは勇者という存在の情報が欲しい

神様は『魔王になる』ではなく『魔王を作る』と言った。

何故作るのか。

大災害をおこしたいから

じゃあなぜ自分で魔王にならないのか

魔王は恨まれて攻撃されて、嫌われるだろう。そうなると勇者のよ
うな存在が現れて殺される、もしくは倒されるだろう

つまり魔王になると、殺されるから

だがそいつは殺されても復活するはずだ。

なら魔王は“殺される役”なんだろう。

だとするとそれは“勇者が来る”ということが前提だ

ならばそいつの狙いはその勇者か、その勇者の冒険や物語を見るこ
とだろう

勇者が目的ならそいつは勇者にどんな形にしろ憧れている

そいつが憧れた伝承があるのならそれをベースに魔王を作るはず
だ。

魔王が現れる場所があるのならそこに行けば魔王を作ってるだろ
うし、完成している魔王がいたとしても消せばそれで終わりだ

勇者の物語を見るのが目的だったとしても伝承をベースに物語が
進むはずだ。進ませるために仕掛けをしないといけないはずだし、仕
掛けてる途中のところで会うことができるかもしれない

つまり、勇者の伝承でも絵本でも小説でもなんでも、勇者の情報が欲しいのだ

ギルドにやってきた理由は資料室でもあされなかなーと思ったからだ

この辺の地図を手に入れたのは実はたまたまだったりする
最悪地図は自分で作るしかないかとも思っていたりしたし
資料室に入るには許可がいる。

まあ、許可を取るのも面倒くさいので空間魔法で中に直接入って来たのだが

冒険者なんて職業やってるやつがわざわざ調べ物をするような連中ではないし資料室には誰もいないので楽に調べられた

“伝記 勇者スターム”

どうやらこの世界の勇者はスタームというらしい。スタームという名前はかなり見た。

あらかたの内容がまとまっていたこの本をそのままコピーしてポーチに入れる。資料室にいる意味もないのでさっさと宿に戻る。スイは宿にお留守番。

とりあえず、魔王がいる場所はわかった。

レイダナルという町から10kmほど離れた場所にあるリヴィテインという巨大クレーターに城があったらしい。

今は更地なので定期的に観察しよう

あとレイダナルからリヴィテインまでの道のりに3カ所砦があったらしいのだが具体的は場所はわからなかったのでその辺は後で観察しながらということ。

魔王を作るための方法は俺が知ってる限り2つ。一つは他人を改造する。二つ目は体を作って魂や霊を憑依させる

一つ目は単純でその辺にいる人を捕まえて身体を改造、魔法の使い方教えるぐらいすればいい

それだけで大体のことはできる

二つ目は体を作るそいつだからできることだがかなり面倒くさい。体を作るのはいいとして魂を入れなきゃいけない。文字にすると簡単だが入れる魂を認識できて、操れないといけないのだ。

そいつが感素を直接動かせれないならかなり難しいがごくまれに意思疎通できる霊がいるのだ

A級の魔物としてギルドに認識されているゴーストの、上位互換だ。

ゴーストは魂が空気や水を操って可視化させて、攻撃してくる。現状、倒すことはほぼ無理とされA級冒険者でも追い払うことしかできない

そもそも魂が本体で感素でできているため普通の魔法や剣だと攻撃すらできない。操っている水や空気を消すことでほぼ無害になるが倒せているわけではないのだ

ゴーストは魔物が魔物になる前の不確かな存在で、おそらく霊が長い時間を過ごしすぎて意思がすり減っていったのだろう。

ちよūdいので魔物の生まれ方について詳しく話しておこう。

魔物はかすかに残っていた意思が人間に消費された感素に触れることで欲が生まれ実体化する。

そして、生物を殺したり、性欲を満たそうとしたり食欲を満たそうとしたりとろんな欲望から魔物は生まれる。だからこそ魔物の種類が多いのだろう

魔物は人間の欲深さともいえる存在なのだ

閑話休題

ゴーストの上位互換は意思がすり減らなかつた霊だ。本当に精神力が強い奴か強すぎる欲を持っている奴の霊だろう。目撃者も例も名前もついてないほど少ない、まじで珍しい存在だ。

そんな存在にそいつが出会う可能性は少ないのだが、今現状想定できる最悪の自体として魔王がゴーストの上位互換になってそいつにあっていることだ。霊体の状態だと感素を操ることはできないのだが肉体持った場合文字道理魔王が復活するのだから面倒くさいところの上ない。

消すのも倒すのも簡単だし何ならさっさと成仏させることも余裕だが、さすがに魔王倒したら注目される。そこ手遅れとか言わない、まだこの町のギルドにしか広まってないから！さすがに魔王倒したら世界中に知れ渡るから！

そうなる前に魔王の魂を成仏させたい。まだ魔王の魂が健在かどうかは確認してないけど。

次の神様との通信の時に確認しよう。

俺が働かないためには勇者(笑)をこっちも作るかだれか強い人に勇者(笑)になってもらって倒してもらおうか。魔王が作られる前に未然に防げればいい話なのでまあいいや。多分後から来ても大して問題ない。被害は全部最小限にして俺が消せる。きずくことができたら

はい情報整理終わり！さて、とりあえず拠点をレイダングルに移すか。リヴィテインの監視はしつつここから歩いてレイダングルまで歩くところ3年ほど、俺が全速力で移動したら2時間ぐらいだろう。

そこそこ遠いわけだが旅をするならやっぱり馬車とか歩きで移動しないとつまらない。世界の危機だろうがこれだけは譲らない。絶対。

最悪空間魔法で1瞬だしどれだけ遠くても座標がなんとなくわかっていればそれだけで行けるのでのんびりとハンター生活と神器集めに勤しむ事にしようか

時計を見るともう11時半だった。

そろそろ出るか。

「スイ、そろそろ行くよ。」

「キュウ〜」

なんか不機嫌そうにこっち見てる

「なんで不機嫌なんだよ…何？かまってほしかったの？」

「キュ！ウ！ウウウウ！」

「はいはい。この町出たら歩きながら遊んでやるから待ってろ」

「キュ！ウ！ウウウ」

「もう行くぞ」

「キュ！」

髪に噛みつきながらまだ不機嫌そうなスイを無視しながら1階に降りる。カウンターには昨日やたら絡んできた女の子がいた

「泊めて下さってありがとうございます。」

一応挨拶だけしておく、あとスイもう髪むしらないでくれませんかね？この年で10円禿とか割とシャレにならないんですけど。治せるけど

カウンターの女の子は昨日より目力強めで驚きと少しの恨みを込めた目で睨んでくるけどおもつくそ無視して宿を出る。とりあえずギルドに行つてクラネスさんに挨拶だけしてさっさと出発しよう。あとこの町でお世話になった人は門番のおっさんかな？ラムス力卿？誰それ

少し歩いてギルドに到着。クラネスさんの遺伝子を探してここにいるのは把握済み。

今は受付で依頼を受けてる。

受付にいるクラネスさんに声をかける

「クラネスさん」

「ん？お、お前か」

「どうも、もうこの町を出るので一応挨拶に来ました。」

「もう行くのか？まだ昨日来たばかりだろう？」

「一応旅の目的はあるので。行きたい場所がちよつと遠いんですよ」

「ちなみにどこなんだ？」

「レイダナルですよ。歩いて3年ぐらいですかね？馬車なら休まず行っても2年とちよつとぐらいいですかね？」

「そらまた…遠いな。何しに行くんだ？」

「ちよつとした人助けですかね？」

「なぜ疑問形…まあ頑張れや。すぐ出るんだろ？」

「はい。そろそろ行きますね。まだどこかでお会いできればお会いしましょう」

「ああ。じゃあな」